

川上宏奨学金受給研究成果報告書

研究題目：虐待報道における被害者の表情が受け手心理に及ぼす影響

1. 研究目的

本研究の目的は、虐待報道において提示される被害者の顔写真の表情が、受け手の加害者への怒り感情に及ぼす影響を明らかにすることであった。本研究を通して、報道において非言語情報である表情が受け手の心理にどのように作用するのかを検討し、報道における視覚情報の影響に関する新たな知見を得ることを目指した。

2. 研究方法

インターネット上での質問紙実験を行った。実験は、調査会社が提供するセルフ型アンケートツールのモニターを活用して実施した。実験参加者は、全国の男女 300 名（男性 203 名、女性 97 名、平均年齢 57.6 歳、 $SD=14.09$ ）であった。実験参加者を虐待の種類（児童・高齢者）と表情の種類（笑顔・真顔・悲しい顔）を組み合わせた 6 つの条件に無作為に割り当てた。実験は、2 要因（2 水準・3 水準）の参加者間計画であった。実験刺激は、筆者が虐待事件を想定した架空のニュース記事および被害者の顔写真を作成し、使用した。記事の内容は条件間で統一し、被害者の表情のみが異なるように統制した。実験参加者には、表情の異なる被害者の写真を含むニュース記事を提示した上で、加害者への怒り感情の程度を質問紙によって測定した。

3. 研究結果・考察

虐待の種類を独立変数、加害者への怒り感情を従属変数とする分散分析を行った。その結果、児童虐待報道では、被害者の表情によって加害者への怒り感情に差は見られなかったが、高齢者虐待報道では、笑顔条件が悲しい顔条件より怒り感情が高まることが明らかになった。表情の影響は、虐待の種類によって異なることが示されたことから、さらに、怒り感情に及ぼす要因をより包括的に明らかにするため、実験参加者の属性などを含めた重回帰分析を行った。その結果、児童虐待報道では、実験参加者の年齢および虐待報道への関心度が怒り感情に関連していたが、高齢者虐待報道では、表情条件および虐待報道への関心度が怒

り感情に関連していることが明らかになった。以上のことから、被害者の表情が、加害者への怒り感情に及ぼす影響は、虐待の種類だけでなく、受け手の年齢や虐待報道への関心の程度によっても左右されることが示された。なお、本研究では、被害者の顔写真をAIで生成したため、実際の報道で用いられる写真と比べて、現実感や臨場感に欠けていた可能性がある。そのため、今後は、倫理的配慮を十分に行った上で、実在する人物の写真や過去に起きた実際の報道など、より現実感のある刺激を用いた実験を行うことも意義があるだろう。

4. 奨学金の主な使用用途

インターネット上で実施した質問紙実験における実験参加者への謝礼費として使用した。

5. 謝辞

奨学金を給付してくださった故川上宏先生ならびにご家族、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。奨学金をいただけたことで、より多くの実験参加者を募ることができ、充実したデータを収集することができました。本当にありがとうございました。